■この本を読むあなたへ

この本は、4つの章で構成しています。

1　夢の中で走ってます！　松本誠司

脳性マヒの障害をもって生まれた松本さんが成長とともに障害を受け入れながら、社会の矛盾に出会い、全障研をはじめとする障害者運動に出会ってきたあゆみをつづっています。

2　死んでる暇なし　井上吉郎

井上さんは、生協運動で障害者に出会い、障害者運動に関わり、障害者のための政治づくりに奮闘してこられました。60歳で受傷。その後の生き様を熱く語ります。

3　クロスインタビュー　井上吉郎　×　松本誠司

松本さんと井上さんが、おたがいにインタビュー。知り合って20年以上のお二人ですが、「へーそうだったんだー」の新発見もいっぱい。相手の答えから自分を見つめる機会にもなりました。理解が深まった二人の時空間をみなさんにお届けします。

4　「障害」と「差別」と「迷惑」をどう考える　木全和巳

社会福祉と権利擁護が専門の木全さんが、二人の手記とインタビューをもとに、「障害」、「差別」、「迷惑」について考えます。

どのページからでも読めますが、順番どおり、「手記」→「インタビュー」→「まとめ」と読みすすみ、執筆者とともに本書のテーマについて考えていただければ幸いです。

夢の中で走ってます！

松本誠司
まつもとせいし

1 「おかあちゃんと帰りたい」

僕は、1968年3月に高知県の室戸市で生まれました。当時僕が生まれた病院では、「仮死状態」で生まれた子どもが、僕の他にもう一人保育器に入れられていたと聞いています。

当時僕の家族は、父と姉と長兄は大阪に出稼ぎに行っていました。母も土木作業に従事していたので、僕は祖父母に育てられました。いわゆる〝おばあちゃん子〟だったのです。祖母や母は歩けないことを心配しつつも「普通にしゃべりゆうき、そのうち歩きだすろう」と思っていたそうです。そして、3歳児健診で「脳性マヒ」と診断されました。

その後、保育園に通うこともなく高知市にある肢体不自由児施設・子鹿園に「母子入園」しました。3ヶ月間治療や訓練の仕方（当時はリハビリのことを訓練と呼びました）を母親が学び、自宅で訓練ができるようにすることが目的でした。初めての「母子入園」から帰宅したとき、父が砂浜から砂を取ってきて訓練で使う砂袋を作ったり、訓練で使う玉さしというおもちゃを買ってくれました。

僕は、幼いながらも、これで自宅で家族と暮らしながら訓練をしたら歩けるようになると思っていました。しかし、「母子入園」を数回繰り返した後、5歳のときから子鹿園での〝一人暮らし〟が始まりました。

0歳　母に抱かれて

最初にいた病棟は「重度病棟」といわれるところで、ワンフロアに20名ほどの子どもたちが生活をしていました。そこには僕のように伝い歩きができる子から、「寝たきり」の子どもまでいました。でも、このころの僕には、障害という認識はありませんでした。

まだ5歳になったばかりの僕にとって、母や家族と離れて暮らすことは、とても寂しく悲しいことでした。母から電話がくるたびに「歯みがき粉がなくなった」「ミニカーが便所に落ちた」などその日の出来事を話しました。「買うて持って来てほしい」「おかあちゃに会いたい」という思いでいっぱいでした。

毎週日曜日に母親が面会に来てくれました。お昼ごはんを施設の近くの公園や食堂で食べたり、繁華街にあるデパートに遊びに連れて行ってくれました。それは、訓練訓練の毎日のなかで、楽しい楽しい日曜日でした。楽しいことは続きません。夕方になると母は家へ帰ります。

窓越しに「さよなら」「また、今度の日曜に来るきに」と言葉を交わして別れるのですが、親子ともども涙を流していました。「おかあちゃんと一緒に帰りたい」と涙声で言っても母は連れて帰ってはくれません。

「なぜ、僕だけがここ（施設）にいなければならないのか」という悔しさもありました。〝一人暮らし〟を始めたころ、祖母や祖父との会話を思い出して、「雨が降りだしたきに、田を見に行かんといかん」とか、すり傷ができたときは「鮎のハラワタを塗って」と看護婦さんに言っていたので、ついたあだ名が〝おじい〟でした。

2歳　カタカタ

(2) 障害がなかったら

僕が高校生のころは、1980年代のバブル絶頂の時代でした。「売り手市場」などと言われ、学生が就職する企業を選択する時代でした。

当時の僕は、「手に職をつける」ことを考えていました。今では一人が1台ずつパソコンをもって仕事をする時代ですが、当時は「コンピューター」は特殊な装置という感じでしたから、コンピューターを扱うための特別な知識や技術が必要な時代でした。

高等部3年の1学期には高知市内にあったコンピューターソフトを開発する会社に実習に行き、夏休みにも2週間の研修を受けて、就職する気でいました。会社の方からも、「ぜひ来てほしい」という話もありました。

ただし、条件がつけられたのです。その条件は、「1年間、東京のあるメーカーのコンピューター研究所で研修を受けてくる」というものでした。今なら1年間の研修でも東京で暮らすこともなんとかできるのではないかと思うのですが、当時の僕にはその勇気がありませんでした。残念ながら断念せざるをえませんでした。

高等部3年の2学期になり、「もう後のない感じ」で就職活動に専念していました。

進路の先生、担任の先生、職安の担当の方から紹介された会社に面接に行くようにしていました。冬休みの直前まで、雪の降るなか面接に行きましたが、全滅でした。

最初に行った会社は、障害者を中心にしてコンピューターのソフトを作るという所でした。養護学校の先輩たちが二〜三人いたのですが、立ち上げたばかりなので人はそんなに

4歳　母子入園

たくさん雇えないということでした。その後面接に行ったところでは、「障害がなかったら、明日からでも来てほしいが……」と言われました。つまり、「障害があるから雇わない」ということを公然と言われたことになります。「障害者権利条約」や「障害者差別解消法」がある現代ならどうなるのでしょうか。

高知県の県立高校や高等部の卒業式は、3月1日です。卒業試験も終わり、同級生たちと卒業アルバム作りが始まっても就職先が決まっていませんでした。

そんなある日、高知市内のクリーニング店へ面接に行くと、「どれだけ仕事ができるのかわからないので、実習に来てほしい」と言われました。

そして、実習の3日目の帰り際に社長さんから「3月のいつから来れる?」と聞かれ、卒業式の直前に就職が決まりました。

このとき、本当にうれしかったし、ようやく就職が決まったという安堵感がありました。

クリーニング店は、2階にあった古いプレス機に変わって、僕が仕事をしやすいように安全装置のついたプレス機を1階に導入してくれました。

社長さんをはじめ、会社のみなさんが優しく迎えてくれました。

(3) 社会との出会い

このクリーニング店で、社会の厳しさを知ることになります。

この会社で、僕は、ワイシャツの襟とカフスをプレスする仕事をしていました。

5歳　〝一人暮らし〟中

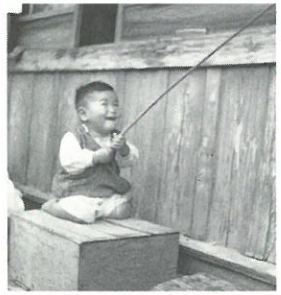
小中学部は、子鹿園に併設されていた、若草養護学校の子鹿園分校で9年間学びました。小学部から中学部へと進学するとき、施設の職員さんから「地元の中学校へ行ってみないか」という話がありましたが、実際に日々の通学や学校生活をどうするのかという具体的な話になると、困難なことも多々あることから実現しませんでした。

高等部も普通高校にという話がありましたが、実現しませんでした。このとき、担任の先生から「あなたが合格したらそのぶんだれかが落ちることになるから力試しに高校受験をすることはしてはいけません」と言われたことはショックな面と「受けたら通るのか」という自信ももらいました。

高等部を卒業した後は、クリーニング店に就職し、3年後に退職し、その後あさひ共同作業所に30年近く通いつづけています。

あさひ共同作業所は、1985年に若草養護学校を卒業した障害者の親たちが中心になり、設立し、運営してきた小規模の作業所です。障害者福祉制度が変わっていくなかで、無認可の共同作業所では運営しづらくなりNPO法人を2003年10月に設立し、2009年4月に就労継続支援B型へと新体系への移行をしました。

現在僕は、法人の副理事長として法人運営に関わると同時に、利用者としてリサイクルの活動（空き缶の回収や廃棄電線の被覆（ひふく）を取り除く作業）に携わっています。



2歳　つりあそび

2　障害を感じたとき

（1）思いっきり走ったときみたい？

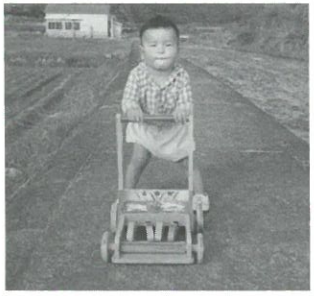
僕は、高等部を卒業したらコンピューターとか電気関係の仕事に就きたいと思っていました。小学部のころから身体検査のたびに「色盲」で引っかかっていたので、進路の先生から「正確な検査を受けておいた方がいい」と言われて県立病院の眼科を受診しました。

視力検査や色弱の検査をいくつかして、眼底検査をしようとしていたときのことです。担当の女医さんが、「今から眼底検査をします。すこし眼に空気があたりますよ。そうそう、運動場で思いっきり走ったとき、空気を感じるみたいな感じです」と。

彼女に悪気はなく、日常のひとコマだったと思います。

が、僕にしてみれば「眼に空気を感じるほどのスピードで走った」経験はありません。検査中、というか診察室にいる間は〝空気〟ではなく、〝ショック〟を感じていました。今思えば、医師という病気や障害について詳しいと思われている人から言われたことには〝ショック〟というより〝憤り〟を感じたと言うべきかもしれません。

検査の結果は「赤緑色弱」というもので、理科系の職業に就くには困難があるが、絶対に無理ではないとも言われました。



3歳　どこに行くにもカタカタ